松井政豊の和歌活動と周辺の歌人達

付・松井政豊略年譜

中川　豊

はじめに

享保期（一七一六―一七三六）であれば、勅撰集・『百人一首』・『伊勢物語』など、和歌を学ぶための必読の古典が出版により出揃っていた。京都では有賀長伯（一六六一―一七三七）・香川宣阿（一六四六―一七三五）といった、いわゆる地下二条派の宗匠達が、歌枕の考証、古典注釈、和歌実作のための啓蒙書などを刊行している。さらに踏み込んで学ぼうとする者は、宗匠筋による和歌添削指導を直接受けることも可能であった。素人が和歌を学ぼうとした際、身の丈に合った和歌学習の環境は十分に整っていたと言っていい。

ほぼ同時代、京都に松井政豊（一六七八―一七四六）という医者がいた。彼は本職の傍ら、堂上歌人烏丸光栄（一六八九―一七四八）の指導を仰いだ。手近なところでは『名家伝記資料集成』にその名が上がり、出身地・生没年・師系・家集名などが記されている。これまでに歌人として彼の名が取り上げられたとすれば、光栄述、諸門人筆録の聞書『烏丸光栄卿口授』の中に頻出し、光栄の門弟の一人であったというくらいで、地下歌人としての活動は、ほとんど知られていない。

しかし、光栄を中心とした周辺資料の収集過程において、政豊の烏丸門内における和歌活動がやや明らかになり、その重要性を認識するに至った。この無名に近い歌人をこのまま

放置するには、あまりに酷なように思われてきた。彼は、三十歳半ばより中院通躬（一六六八―一七三九）の指導のもと和歌研鑽を積んだ末、四十八歳で光栄に入門。後に光栄より認められ、和歌添削指導を行う許しを得る。とともに烏丸門への入門者斡旋、歌会の設定など烏丸門のために腐心した。彼の許からは、加藤景範（一七二〇―一七九六）のような、次世代の歌壇史に名を留める人物も排出している。享保期、政豊は京都で公家の門弟となり、師烏丸光栄の元でその手足となり一門の和歌指導や門人獲得に尽力した。出版を通じて自らを主張し続けた長伯、宣阿などの地下の専門歌人がいる一方で、公家の高弟として地道に和歌活動に携わった一地下歌人松井政豊に焦点を向けることは、近世和歌史においてさほど無益なことではなかろう。

一　先行研究と関連資料

政豊に関する先行研究二つと、把握した政豊の関連資料八点を上げる。

先行研究

○大谷俊太氏「『烏丸光栄卿口授』の諸本―堂上地下間の歌道教授―」（『南山国文論集』十六号、平成四年三月）

○多治比郁夫氏「『祝寿編』と『奉觴篇』―後藤養庵・香川修庵の六十賀集―」（『杏雨』第五号　平成十四年四月）

関連資料

○蓮沼和歌集（政豊家集）

○松井政豊点諸家詠草（政豊添削による景範等諸家詠草集。全て政豊筆）

○松のした露（政豊点加藤景範詠草。景範筆）

○同門和歌百首案[1]（烏丸門の撰集。政豊五首入集）

○烏丸光栄卿口授[2]（光栄述、門人筆録の聞書。政豊頻出）

○中院通茂百首[3]（中院通茂家集。政豊筆）

○松井政豊に与ふる書[4]（和歌教訓書。光栄より政豊へ下賜）

○松井一学師教訓（光栄から政豊への歌学書か[5]）

大谷氏は、『烏丸光栄卿口授』の諸本を検討し、堂上と地

下の歌道教授のあり方について考察し、多治比氏は、医者としての政豊の医統を明らかにした。

さて、大谷氏は、その論考の注において「光栄の地下の門人の中では高弟に当たる」と門人内での政豊の位置づけにふれているのであるが、どのような点からそのようなことがいえるのか、具体的に例を上げて確認しておきたい。

年に二たびおほやけの御暇有べき比をうかゞひて、しづやかに清らなる処をゑらみ公を請し奉り、ひなの都の人々を集めてひとつ筵に侍り。御前にて題をさぐり御みづからも首の題とらせたまひ、人々のをもやがて御点たまはり、さま〴〵御教へ聞えさせ給ふ。あなたうと。今日のたうとさや、と思はぬ人なし。かゝるいみじき事、此人なくてなりなんやは。

（『蓮沼和歌集』跋文　＊上記資料の引用は、私に句読点、濁点を付した）

跋文という性質により、やや客観性を欠くかもしれないが、政豊の門人内における位置をよく示していよう。光栄を招聘しての歌会は、年に二回、光栄の都合に合わせ、慎重に場所を選定して行われていたという。これらの当座興行が、政豊なしではなし得なかったと伝えているのである。この点を素直に受け取るならば、門人達にとって政豊は欠くことができない存在であったはずである。

この他、跋文には政豊について「されば同じ流れをくむともがら、此翁の心おきてになびかぬ人なし」、「おのづから翁を一日の師にして」などと記しており、門内での指導的立場が浮き彫りとなる。

さらに、次のような例もある。

当座よむへしと被仰。短尺題は尊師御染筆にて、御持参の硯箱のふたへ、牧庄次短尺をもり申され、巻頭尊師御とり被為遊、夫より段々めい〳〵とり申き。巻軸は松井一学政豊江御さしつ有。

（『烏丸光栄卿口授』）

寛保元年（一七四一）五月十二日に光栄を招いての門人九人による当座について記した箇所である。注目すべきは「巻軸は松井一学政豊江御さしつ有。」で、光栄が政豊に巻軸を詠むよう指示している点である。巻軸歌が巻頭歌と照応され、作者が選定されるという認識に立てば、門人内での政豊の位置は自ずと知られよう。

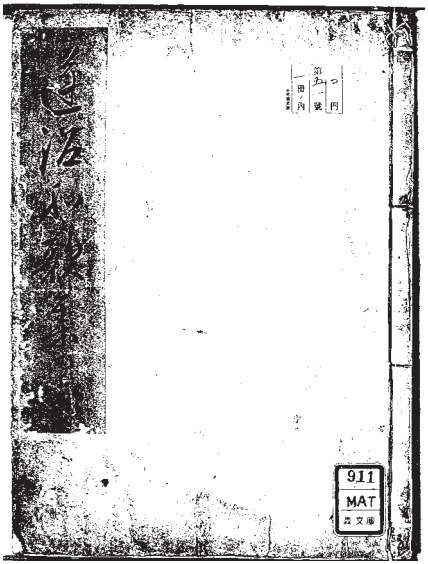
二　家集『蓮沼和歌集』

まずは彼の家集の書誌を記し、歌歴について述べておきたい。

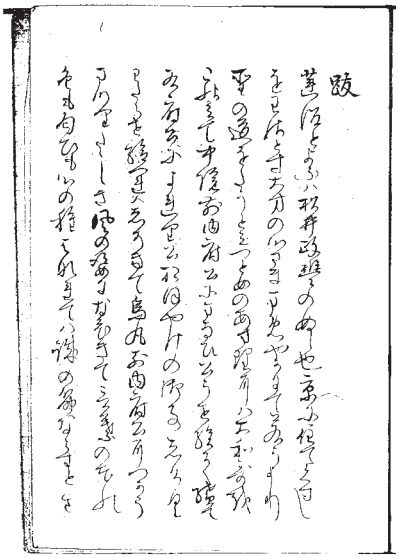
蓮沼和歌集　大阪市立大学学術情報総合センター森文庫蔵
911・158MAT

縦二三・一×一六・九糎の袋綴じ写本一冊。延享五年（一七四八）写。香色卍繋表紙原装。左肩題簽「蓮沼和歌集」。内題なし。料紙は楮紙。全一三六丁。一面九行、一首一行書。中井誠之の序文（景範筆）・加藤景範の跋文（自筆）を付す。和歌本文は、景範の父信成筆。全一一三三首。印記は「森文庫」（森繁夫）。

管見に入った伝本は森文庫本の一本のみ。伝来については、「わたらへのおほん神庫におさめ奉らん」（跋文）とあり、本来は豊宮崎文庫へ奉納する予定であったが、どういう経緯であろうか、森繁夫の所有に至った。政豊は、光栄の前に中院通茂、続いて同通躬に学んでいる。通茂から通躬へ移ったのは通茂の死によっており（跋文）、さらに通躬から光栄へ移っ



（『蓮沼和歌集』表紙）



（『蓮沼和歌集』跋文）

たのは、通躬が「おほやけの御事しげくわたらせ給」（跋文）という理由であった。和歌本文の巻頭には「中院前右府公御合点詠草／正徳三年癸巳九月那波常祐月次に」とあり、通躬より合格とされた詠草が編年順に、享保四年（一七一九）まで続いている。続いて「蓮沼和歌遺稿／烏丸前内府公御合点詠草」とあり、以後光栄の合格とした歌が部立てで配列される。ともあれ、正徳三年（三十六歳）から死（六十九歳）の延享三年までの三十四年間、通茂の指導を含めるとそれ以上に彼は、一貫して当代一流の公家を師として添削指導を受け続け、二条流の和歌に親しんだのである。

続いて『蓮沼和歌集』の詞書き・歌会注記に注目し、交友・行動範囲を示したい。資料1は、詞書き、歌会注記から政豊が参加した歌会の亭主名を上げ、その下に（　）で出座した会の種類を示し、さらにその下に出座した合計の回数を数字で示したものである。例えば最初の「那波常祐（当座・月次）7」は、那波常祐亭で行われた当座と月次に出座した合計が七回であるということを示している。各亭での歌会回数の多寡が必ずしも、亭主との親交の深さを示すものではないにしろ、交流状況を知る上での一つの基準となろう（以下○印は光栄門を示す。亭主名が記されていない場合は場所を示している）。

資料1

那波常祐（当座・月次）7　川喜田爾然斎（会・内会・当座・兼題・月次）43　鈴木正寿［妙満寺］（当座）4　○後藤則明［政豊亭来訪も含む］（会・当座）22　○中倉忠悦（会・当座・御成当座）14　嘯月（会・当座）17　○村田景忠（会・当座）2　○松村昌條（兼題［欠席］）1　出雲寺和泉椽元丘（会・当座）5　○妻屋秀員（会・当座）2　森三竹（会・当座）7　丸山［地名か］（当座）1　糟谷（当座）1　○長江喜維（会・当座）5　○［加藤］信成（両吟）1　政輔（当座）1　中村（当座・両吟）2　俊方（旅亭当座）1　奥井長由（当座）1　○久保倉盛紹　旅亭（光栄御成当座）1　○安田長伯（当座）1［歌なし］　似雲（住めるをとひて）1　聖護院森大村亭（当座）1　三本木坂田亭御成（当座）9　吉田［地名か］（当座）1　○土佐［光芳］（歌会）1　圓山会（当座）1　烏丸殿家にて1　勢州山田にて（当座）4　浪華五友軒会2　勢州射和にて1　法然寺

（当座）1

同じ烏丸門で親密であったと考えられる加藤信成亭への出座が一回、妻屋秀員亭への出座が二回というのは、あまりにも少ない印象を受ける。加藤信成（一六八七―一七五一）は政豊の添削を受け、『蓮沼和歌集』を筆写した人物。妻屋秀員（一六八二―一七六五）は政豊の取り次ぎにより、烏丸門へ入門した（後述）間柄である。また、政豊・秀員・信成の三人は連れだって吉野山へ桜を見に行くなどということもあった。[6] 信成の家集『承露吟草』[7]を閲してみると、信成の政豊亭への出座は計四回。同様に、秀員の家集『積翠集』[8]を見ると、秀員の政豊亭への出座は二回と相互の歌会出席は認められるものの、やはり多いとは言えず、意外に歌会で顔をつきあわせる機会は少なかったのである。理由は、政豊が京都在住で、彼らは大坂であったという点が単純に推測される。

出座の最も多かったのは、川喜田爾然斎亭での歌会である。川喜田爾然斎（一六八五―一七五五）は、伊勢安濃津の富商で江戸で木綿を商った。享保七年（一七二二）三十八歳で剃髪して玄無と名乗り、京都嵯峨野に庵を結んで隠棲した。詞書き・歌会注記には「爾然斎会兼題」などの他に「光盛宅」などと爾然斎の俗名も散見し、政豊は爾然斎が出家する享保七年以前より爾然斎の歌会に出座していたとみられる。爾然斎は、武者小路実陰門であった[9]が、烏丸光栄も実陰を師としていた。その辺りにも政豊が爾然斎亭へ足繁く通った理由があろう。

室町錦小路に住居を構えていた中倉忠悦（烏丸門・医師）亭への出座が十四回と、比較的多いのは、同門でやはり京住まいという点と、同じ医師という点が考えられる。

その他、目に留まるのが「勢州山田にて当座」「勢州射和（いざわ）にて当座」といった伊勢での当座への出座である。『蓮沼和歌集』（九九八）に、「景忠伊勢の国に帰る頃はからず同じくともなひ下りて松坂にて別るゝとて読侍（ママ）る」の一首がみられるので、この下向のときに出座したのかもしれない。伊勢の御師（おんし）福井末紀は、政豊に添削を受けており、『蓮沼和歌集』に「梅庵を題す勢州山田福井末紀庵号／年寒き雪のうちより咲出て梅も庵の名をぞうづまぬ」の一首（九九四）が見られる。また、伊勢射和の豪商竹川政秀からは和歌の勧進を受けている（一〇七〇）。前述の「勢州射和にて当座」は竹川政秀亭であろう。『蓮沼和歌集』が本来豊宮崎文庫への奉納を

意図していたのは、こうした伊勢の人々との交流から意識されていったものでなかったろうか。

三　指南を受けた人々

『和歌問答』[10]に政豊について次のような記述がある。

御答に、歌は平常の器用不器用にはよらぬ也。只心持と執心の義也。地下たり共松井一学なとは聞及の通、故内府門弟の中にてつま点ゆるされし者也。是も稽古の致方能故にて有へし。

『和歌問答』は石塚寂翁（一七四六以前―一八一六以降[11]）が、日野資枝（一七三七―一八〇一）の口述を筆録した聞書である。資枝は光栄の実子。「一学」は政豊の通称。ここで注目したいのは、資枝によって政豊が光栄より「つま点」を許された、と述べられていることである。この「つま点」が具体的にどういうことを指しているのかは判然としないのであるが、文脈から師匠のかわりに仮に点を施す、といったくらいの意味合いを持っていたとの指摘がある[12]。その証左となる資料が伝わっている。『松井政豊点諸家詠草』である。書誌を記す。

松井政豊点諸家詠草（所蔵先目録書名［和歌集］）内藤記念くすり博物館蔵４９９１６-９１１

縦二三・六×一六・六糎の袋綴じ写本一冊。収録期間享保一九～元文二年。政豊写。縹色菊花文散らし表紙原装。表紙左肩に題簽あり（無記）。内題なし。巻頭に「享保十九年甲寅四月已来政豊添削」とある。料紙は楮紙。墨付き一二〇丁。全歌数一〇九八首。印記「松岡／蔵書」（不詳）。

該書は、光栄門人を含んだ諸家から寄せられた詠草に政豊が合点・添削・批言を施した添削詠草であるが、詠草と添削・批言が同筆という点から、返却する前に政豊が詠草と自身の添削結果をそのまま転写した冊子本と判断してよい。政豊自筆の『中院通茂百首』（大阪市立大学学術情報総合センター蔵）と同筆で、政豊筆と判断できる。さらに縹色菊花文散らしの表紙も『中院通茂百首』と同じである。書誌に記したように収録期間は享保十九年（一七三四）から元文二年（一七三七）までの四年間。

ところで、『松のした露』（大阪市立大学学術情報総合セン

ター蔵）は、加藤景範の詠草に対して政豊が合点・添削を施した添削詠草である。景範自筆。詠出期間は元文二年のみで、全歌数一二八首。元文二年は景範十八歳、政豊は六十歳。政豊に提出された景範の原詠草は、添削を受けて返却される。その添削結果を景範自身が書き継いだ（後からまとめて転写か）冊子本である。提出した歌すべてを記しており、合格歌、不合格歌が混在する。つまり『松井政豊点諸家詠草』は指導者側の控え、『松のした露』は添削を受けた側の控えである。『松井政豊点諸家詠草』には元文二年の景範の詠草が一〇六首含まれており、双方の資料から提出された歌、添削結果などが確認できる。比較すると『松井政豊点諸家詠草』には、景範が政豊に提出した詠草のうち、添削が施された合格歌のみが収録されていることが判明する。つまり、政豊がよしとせず、添削あるいは批言を施さなかった歌については原則、政豊は書き留めていない。この点から『松井政豊点諸家詠草』は、景範をはじめ、諸氏より送られてきた詠草のうち、見込みがなく、添削・批言を加えなかった歌は無視し、自身が手を入れた歌のみを、添削結果と共に転写し、手控えとしたものと判断できる。後に自身の添削・批言を確認するためであろう。和歌指導者としての彼の生真面目な一面といえようか。

では、『松井政豊点諸家詠草』にはどのような人物が何首ぐらい添削を受けていたのかを見てみることとする。資料2は、各年代ごとに添削を受けた人物名を上げたものである。（　）内の漢数字は、収録歌数を示す。

資料2

享保十九年（四月より年末まで）

好風（三八）　加藤景允（六）　加藤景範（二五）　照綱（九）　福井末紀（四）　正武（二〇）　方孝（二七）
敬重（一四）　加藤信成（七）　出雲寺和泉元丘（一）
平野新右衛門善長（一）　［太田カ］信義（三）　林友直（一）　望月彦四郎英貞（一）　和常（六）　則孝（五）
今茂（一）　好在（一）

享保二十年

加藤景範（五五）　方孝（六十）　敬重（二二）　重遠（三）　好風（四一）　加藤信成（十六）　妻屋新兵衛昌方（四）　福井末紀（三八）　森源治兼善（四）　正武（四三）
照綱（九）　昌孚（五）　丸尾平三郎祐良（二）　出雲寺文次郎元光（三）

享保二十一年

好風（三七）　秀重（四）　直道（二）　景範（五八）　信成（六七）　方孝（四一）　重敬（二）　出雲寺元光姉の尼（四）　萩原左仲（二）　出雲寺文次郎元光（三）　正武（四二）　福井末紀（一二）　浅田点心（一四）　敬重（一〇）　慈寛（三）　山岡六兵衛常紀（三）　浄相（一）　方政（五）　伯届（一）　元賢（一）　宗貞（一）　祐信（一）　舎重（一）　了空（一）　伯雄（一）　了基（一）　基乗（一）　まさ（二）　季誠（七）　恒軒（一）　習之（一）　昌孚（二）　照綱（一）　岡田恒之進誠致（三）　久通（一）　勝全（一）

元文二年

勝全（九）　方政（三）　加藤景範（一〇六）　加藤信成（三二）　敬重（一）　重遠（一）　正武（三四）　福井末紀（八）　季誠（六）　岡田恒之進誠致（三）　浅田点心（二四）　照綱（四）　春芳（二）　常都（二）　山岡六兵衛常紀（六）　安多（一）　雅豊（二）　瑞岩（三）　長豈（四）　忠英（二五）　太田文兵衛俊員（一）　平野新右衛門善長（一）　道白（二）　和常（六）　おさなき子（一）　長江喜維（一〇）　久通（二）

詠出人数は、享保十九年が十八名、享保二十年が十四名、享保二十一年が三十六名、元文二年が二十七名と、年により詠出人数にばらつきが見られ、また詠出者の出入りもみられる。好在、妻屋昌方などは、四年間を通じて一首という者もいる。師を転じたのか、あるいは、そもそも提出した詠草が少なく、合格歌がわずかという結果になったのであろうか。出雲寺元丘・出雲寺元光・元光の姉など出版書肆関係の顔ぶれが見られるのは興味深いところである。収録歌数が最も多いのは加藤景範で、享保十九年の二十五首からはじまり、五十五首、五十八首、一〇六首と年々増加し、和歌執心の様相が見て取れよう。

さて、政豊に点を受けた人物はほとんどが伝不詳である。従って政豊が烏丸門人以外にまでその指導が及んでいたのかは不明である。しかし『烏丸光栄卿口授』『同門和歌百首案』『宝暦二年二月廿五日摂州上牧村一宮天満宮奉納十首和哥』[13]などの聞書や、門人詠出の撰集・門人を含めた奉納歌集にその名が出てこない人物が多数見られることから「つま点」が許可されて、後者の門人外の人々にまで指導を行っていたと

捉えておきたい。元文二年には「おさなき子」なども含んでいるのも、その理由である。後述するが、こうした未入門の人々の中から希望者を選定して、入門へと斡旋する役割を政豊は担っていたと推測しておく。

以下資料3として、『松井政豊点諸家詠草』中の添削を受けた人々のうち、何らかの情報が得られる人物について推定も含め、各年代ごとに掲出した[14]。

資料3

享保十九年

景充　加藤氏。一太郎、後に一菴。加藤信成の甥。信成に養育される（大阪府立中之島図書館蔵『加藤氏系図』）。

景範　加藤氏。竹里と号する。加藤信成の長男。（多治比郁夫氏「加藤景範年譜――懐徳堂の歌人――」『大阪府立図書館紀要』八、昭和四十七年三月）

末紀　福井氏。伊勢の御師。平間長雅編『奉納千首和歌』、『葵心集』、『心花集』などに入集。

正武　天明元年に加藤景範は、有賀長収・正武とともに鳴門へ向かっているが、その「正武」と同一人物か。（大阪府立中之島図書館蔵『加藤竹里文集』・多治比郁夫氏「加藤景範年譜――懐徳堂の歌人――」『大阪府立図書館紀要』八、昭和四十七年三月）

敬重　『烏丸光栄等一夜百首』（古典文庫六六四『烏丸光栄関係資料集』所収）の詠者「敬重」と同一人物か。

出雲寺和泉　元丘か。出版書肆。『新玉津嶋社奉納和歌』に一首入集。

林友直　『和歌継塵集』に二首、『和歌山下水』に一首入集の「友直」と同一人物か。

好在　『清地草』入集の「佐々木好在」（「伯州米子勝田宮司」）と同一人物か。

享保二十年

半田重遠　光栄門。忠助。『同門和歌百首案』に九首入集（古典文庫『烏丸光栄関係資料集』に所収）。

信成　加藤氏。元文二年八月十九日、光栄へ入門。景範の父。（『承露吟草』・多治比郁夫氏「加藤景範年譜――懐徳堂の歌人――」『大阪府立図書館紀要』八、昭和四十七年三月）

妻屋昌方　妻屋氏。秀員の養子。秀員に後を継ぐべき子がなかったため、松坂から迎えられ庄屋職を継ぐ。（松

原市史編さん室編『妻屋秀員と烏丸光栄口授』松原市役所、平成九年三月）

出雲寺文次郎元光　出版書肆。

享保二一年

直道　『烏之迹』に一首入集の「中山内膳直道」と同一人物か。

元賢　『新玉津嶋社奉納和歌』に一首入集の「元賢」と同一人物か。

宗貞　『新歌さゝれ石』に二首、『和歌継塵集』に二首、『新玉津嶋社奉納和歌』に六首入集の「宗隆」と同一人物か。

伯雄　『新玉津嶋社奉納和歌』に一首入集の「伯雄」と同一人物か。

元文二年

雅豊　『烏之迹』に二首、『歌林尾花末』に一首、『新歌さゝれ石』に二首入集の「雅豊」と同一人物か。

長江喜維　光栄門。『烏丸光栄卿口授』に頻出。『蓮沼和歌集』では、喜維亭での当座に政豊が出座している。

四　烏丸門入門への斡旋

長伯や宣阿などの地下二条派宗匠達が台頭してくる中、公家は入門を志す者をどのように把握して、入門へと導いたのであろうか。公家世界という閉鎖性により、公家に師を求めようとした場合、そこには何らかの手づるが必要であろうことは、容易に想像がつく。烏丸光栄門の場合、政豊がその仲介役を果たしていたらしい。

享保十五戊年、松井政豊取次にて和歌の御門弟にめし加へらる。御装束、折烏帽子、指貫にて御手つから御熨斗下さるゝ。和歌執心にて寄特也。道に不背様に可心得。詠草一両日中添削相渡すへしとの仰。

（『烏丸光栄卿口授』）

享保十五年（一七三〇）、妻谷秀員が光栄に入門したときの記述である。秀員は、河内生まれ。代々幕府領の庄屋を務めた家柄である。注目したいのは「松井政豊取次にて和歌の御門弟にめし加へらる」と、入門に際し政豊の斡旋が介在したという点である。もう一例『蓮沼和歌集』（一一二四）よ

り同様の資料を上げる。

近江国和田村善福寺の住持信印法師此道をあふぎ都に登り我をしるべとして烏丸亜相公の門に入対面給りよろこび帰るにのぞみて餞の歌よみてよと有しかば(ママ)読て遣し侍る

里遠く隔て住ともろともに心はわかの浦にあそばん

信印なる近江に住む住持が上洛して「我をしるべとして」とあるように、政豊を手引きとして光栄に入門、対面したというのである。二例ではあるが、政豊はこのように光栄に指導を求める人々と、光栄とを繋ぐ役割を果たしている。もちろんすべての人々に対して行ったわけではなかろうが、他の門人が入門の仲介をとったという例は未見である。ともあれ、このような政豊の働きが、入門を潤滑にさせ、光栄の門人獲得に貢献していた点は推測できる。近世期、公家が門人を獲得する際の一端を示していよう。おそらく中院や武者小路といった和歌の家も同様の人物がいて、師に代わり添削や入門の斡旋を受け持つ人物がいたはずである。

最後に

松井政豊は、医者という本職のかたわら堂上のもとで学び、光栄の信頼を得て、烏丸門の中心的存在となり、添削指導を施すまでに成長した。彼は、和歌の秘伝を受けているわけでもなく、また、出版物を世に送り出したわけでもない。従って彼の歌名が京都に聞こえることはなかった。歌人としての評価はあくまで、烏丸門内に留まるといえよう。しかし、当時の歌壇が、いまだ堂上の強い影響下にあった享保期、彼が門内で果たした役割は少なくない。また、長伯・宣阿といった宗匠達とは、同時代にあってまったく接触は見られなかった点も指摘しておきたい。

注

(1) 中川豊『烏丸光栄関係資料集』(古典文庫、平成十四年三月)所収。

(2) 『近世歌学集成　中』(明治書院、平成九年十一月)所収。引用と松井政豊略年譜の頁数は該書によった。

(3) 大阪市立大学学術情報総合センター蔵911・158NA

K。書写年不明。

（4）元文三年（一七三八）五月八日、烏丸光栄が門人中倉直民［忠悦］亭の菊水館へ招聘され御前当座が行われた際、光栄がその場で政豊へ書き与えた和歌教訓書。政豊が光栄に入門して十三年目のことで、ときに光栄五十歳。政豊六十一歳。内容は、『唐書』『孟子』を引用しつつ、詠出における心構えを簡潔に説き示したもの。全文字数約二百字。『烏丸光栄卿口授』に収録。なお、昭和五十四年二月発行の弘文荘古書販売目録に烏丸家旧蔵と伝える『松井政豊に与ふる書』が掲載されている。写真からであるが光栄筆と判断してよい。その伝来からすれば政豊に与えたものの控えか。

（5）名古屋大学付属図書館神宮皇學館本九一一・一〇七-Ｍａ。書名からでは、師である光栄から政豊への口授なのか、政豊自身から誰かへの口授なのか判然としない。大谷俊太氏は「『烏丸光栄卿口授』の諸本―堂上地下間の歌道教授―」の注で、本文にある光栄の歌を「尊師御哥に…」と記述していることなどによって、「政豊による光栄説の祖述と考えるのが妥当であろうか。」と推測している。本文には「こと〴〵しく候との事なり。」「此体ふり候との批言也」などとみえ、指導内容をさらに第三者へ伝えている印象である。該書が伊勢御師（おんし）来田家伝来本である点を考慮すれば、光栄の言説を政豊が来田氏へ伝えたものではなかろうか。

（6）『積翠集』住吉御文庫蔵（未見）。活字として出版されている松原市史編さん室編『妻屋可雪斎とその作品』（松原市役所、昭和五十九年三月）所収『積翠集』によった。八十九番歌。

（7）神宮文庫蔵三門一二四二。島原泰雄氏等編「承露吟草―解説・翻刻・索引―」（皇學館大学人文学会「皇學館論叢」33巻第1号・33巻第2号・33巻第3号　平成十二年二月・四月・六月）に翻刻収録。

（8）注6参照。

（9）津市の石水博物館には『武者小路実陰卿御添削之詠草控』が伝わる。実陰より添削を受けた原詠草が返却された際、それを転写し、書き留めた爾然斎側の控えと判断される。爾然斎の家集は、版本として『爾然斎玄無法師歌集』が文久元年、子孫の川喜田政明によって出版されている。なお、石水博物館には政豊の懐紙が一枚伝えられている。「詠納涼風　和歌政豊　立よればあつさもなつの夕すゝみ松陰ふかくかぜかよひきて」。『蓮沼和歌集』の通し番号四三三番歌（異同なし）。

（10）『近世歌学集成　中』（明治書院、平成九年十一月）所収。

（11）神作研一氏『近世和歌史の研究』（角川学芸出版、二〇一三年一月）二八五頁参照。

（12）大谷俊太氏のご教示による。

（13）注1に収録。

（14）調査に当たっては多治比郁夫・上野洋三氏編『上方歌書集』（上方藝文叢刊1・八木書店、昭和五十七年八月）、上野洋三氏編『近世和歌撰集集成　地下編』（明治書院、昭和六十年四月）を参照した。

［付記］本稿は、東海近世文学会例会における口頭発表に基づいている。席上、また、その後に貴重なご教示を賜りました大谷俊太氏・服部仁氏・早川由美氏・柳沢昌紀氏に深謝申し上げます。

松井政豊略年譜

延宝六年（一六七八）1歳
　誕生（『蓮沼和歌集』跋文）。
正徳三年（一七一三）36歳
　九月、『蓮沼和歌集』巻頭歌は「中院前右府公御合点詠草　正徳三年癸巳九月那波常祐月次に　草花色々　みるにあかぬ秋の野原か置露も千種に匂ふ花の盛は」。この年より享保四年（一七一九）までの詠草は中院通躬の添削を受ける（『蓮沼和歌集』一～六）。通躬以前は、中院通茂の添削を受ける（『蓮沼和歌集』跋文）。
正徳四年（一七一四）37歳
　通躬添削詠草は七首（『蓮沼和歌集』七～十三）。
正徳五年（一七一五）38歳
　通躬添削詠草は十一首（『蓮沼和歌集』十四～二十四）。
享保元年（一七一六）39歳
　通躬添削詠草は九首（『蓮沼和歌集』二十五～三十三）。
享保二年（一七一七）40歳
　通躬添削詠草は十六首（『蓮沼和歌集』三十四～四十九）。
享保三年（一七一八）41歳
　通躬添削詠草は五首（『蓮沼和歌集』五十～五十四）。この年妻を亡くす（『蓮沼和歌集』五十四・五十六）。
享保四年（一七一九）42歳
　通躬添削詠草は三首（『蓮沼和歌集』五十五～五十七）。
享保十年（一七二五）48歳
　八月二十四日、烏丸光栄に入門（『蓮沼和歌集』四七七）。光栄三十七歳。
享保十二年（一七二七）50歳
　四月十一日、三輪執斎が江戸へ帰還。歌を贈る（『蓮沼和歌集』九七九）。
　加藤信成が中院通茂家集『老槐和歌集』を転写する（大阪府立中之島図書館蔵『老槐和歌集』）。
享保十三年（一七二八）51歳

十一月五日、履霜軒［恵藤一雄］二十五回忌。追善和歌詠出（『蓮沼和歌集』一〇〇四）。

享保十四年（一七二九）52歳

六月、美濃国へ下る途中、野洲の河原で夕立に遭う（『蓮沼和歌集』四三〇）。

享保十五年（一七三〇）53歳

政豊の取り次ぎで妻屋秀員が光栄に入門（『烏丸光栄卿口授』五三九頁）。秀員四十八歳。

妻屋秀員が政豊亭での当座に出座（『積翠集』一二）。

享保十七年（一七三二）55歳

三月十八日、爾然斎亭にて柿本社御影供に巻頭歌を詠む（『蓮沼和歌集』一九三）。

享保十九年（一七三四）57歳

四月二十日あまり、信貴山へ登り時鳥の初音を聞き詠出（『蓮沼和歌集』三九九）。

この年、好風・景充・景範・照綱・末紀・正武・方孝等十八名の詠草を添削する（『松井政豊点諸家詠草』）。

享保二十年（一七三五）58歳

正月十七日、私宅当座（『蓮沼和歌集』二三四）。

二月十七日、私宅当座（『蓮沼和歌集』二三五）。

妻屋秀員が政豊亭での当座に出座（『積翠集』三二一）。

この年、加藤景範・方孝・敬重・重遠・好風等十四名の詠草を添削する（『松井政豊点諸家詠草』）。

享保二十一年（一七三六）59歳

三月十八日、丸山会当座（『蓮沼和歌集』二四二）。

四月二十七日、妙満寺当座（『蓮沼和歌集』二四三）。

八月十九日、加藤信成が烏丸光栄に入門（『承露吟草』七二三）。信成五十歳。

この年、好風・直道・景範・信成等三十六名の詠草を添削する（『松井政豊点諸家詠草』）。

元文二年（一七三七）60歳

三月十八日、爾然斎らと長楽寺に遊び、当座を行う（『蓮沼和歌集』二四七）。

一一月二十四日、光栄が荒木田盛紹の旅館へ行く（『栄葉集』二四九四・宮内庁書陵部蔵『光栄公記』）。

加藤信成が政豊六十の賀歌を詠む（『承露吟草』七二五）。

この年、勝全・方政・加藤景範・加藤信成等二十七名の詠草を添削する。加藤景範より送られてきた詠草全一二

八首については、一〇六首に添削・批言を付して、返却前に手控えとして書き留める。（『松井政豊点諸家詠草』『松のした露』）。

元文三年（一七三八）61歳

二月七日、『烏丸光栄卿口授』に「詠歌一体、政豊までつかはす」とあり、烏丸門内での『詠歌一体』の回覧が知られる（『烏丸光栄卿口授』五〇四頁）。

五月八日、中倉法眼（直民・忠悦）の菊水館へ光栄が御成。御前当座が興行される（『蓮沼和歌集』六二八）。政豊へ『松井政豊に与ふる書』を下賜（『烏丸光栄卿口授』四八一頁・五九〇頁・五九一頁・『蓮沼和歌集』跋文）。

元文四年（一七三九）62歳

三月十八日、和泉国歌塚法楽和歌。森本宗範勧進（『蓮沼和歌集』二五六）。

八月十九日、木屋町三条上ル伊賀屋裏座敷同門会興行。光栄御成。御前当座が行われる。出座は政豊・直民・秀員・則明・喜維・信成・景忠・道好の八人（『烏丸光栄卿口授』四八七頁・『蓮沼和歌集』四五一）。

元文五年（一七四〇）63歳

二月、烏丸門の撰集『同門和歌百首案』が成立。詠者は森本宗範（十三首）・妻屋秀員（十首）・松平乗穏（十首）・奥野保悟（九首）・老門禎義（九首）・半田重遠（九首）・藤門周齋（八首）・中倉忠悦（七首）・加藤信成（七首）・池田義成（六首）・松井政豊（五首）・井出信当（四首）・利子（二首）・大乗院前大僧正隆尊（一首）の十四名（『同門和歌百首案』）。

三月二十日頃、加藤信成・妻屋秀員と共に吉野へ花見に出かける（『蓮沼和歌集』二六三～二六七・『承露吟草』一五八～一六二・『積翠集』八九～九三）。

三月二十九日、吉野での秀員の詠草を光栄が添削する（『烏丸光栄卿口授』五〇六頁・『積翠集』八九～九三）。

四月四日、光栄に拝謁。詠出における指導を受ける（『烏丸光栄卿口授』四九六頁）。

六月二十五日、摂州一宮法楽（『蓮沼和歌集』九九三）。

六月二十七日、聖護院森大村氏別荘へ光栄が御成。当座が行われる（『烏丸光栄卿口授』五一二頁）。『蓮沼和歌集』七八九には「三本木御成当座」とある。

寛保元年（一七四一）64歳

三月二十七日、三本木坂田亭へ光栄が御成。当座興行。出座は政豊・中倉忠悦・久保倉盛紹・奥野保悟・後藤則明・長江喜維・加藤信成・村田景忠・道好・尼崎一清・松村昌條・津田基富・勝元・石塚嘉亨・富山定敬（以上門人）・安田長伯・窪田尚安（以上取持）・青木左兵衛尉・牧庄次・花房金吾（以上御供）の二十人（『烏丸光栄卿口授』五二五頁・『蓮沼和歌集』九〇二）。

五月十二日、光栄が三本木に御成。当座興行（『蓮沼和歌集』九九五・『烏丸光栄卿口授』五七六頁）。

六月二十五日、摂津一宮法楽（『蓮沼和歌集』二七〇）。

寛保二年（一七四二）65歳

[三月十八日]、清水成就院同門会当座（『蓮沼和歌集』一八四）。

三月、光栄から加藤景範へ口授がある（『烏丸光栄卿口授』五四〇頁）。

四月十二日、四条室町に新造した中倉法眼亭へ光栄が御成。当座興行。出座は政豊・中倉忠悦・奥野清順・妻屋秀員・後藤則明・長江喜維・尼崎一清・松村昌條・津田基富・喜亭・富山定敬・加藤景範（以上門人）・安田長伯・窪田尚安（以上取持）・桂重周（御供）の十五名（『烏丸光栄卿口授』五四三頁・『蓮沼和歌集』八六五）。

八月二十七日、久保倉盛紹旅亭へ光栄が御成。当座（『蓮沼和歌集』六三五）。

寛保三年（享保十六年カ）[亥の年]（一七四三）66歳

五月十八日、光栄が三本木へ御成。当座（『蓮沼和歌集』一〇九九）。

延享元年（一七四四）67歳

五月十二日、三本木坂田亭へ光栄が御成。当座興行。出座は政豊・中倉忠悦・池田義成・窪田尚安・長江喜維・村田忠興（以上門人）・桂重周（御供）・五十川要人・牧庄次（以上近習）の九人。松田治兵衛も出座か（『烏丸光栄卿口授』五七六頁）。

五月二十八日、光栄が三本木井筒屋座敷へ御成。当座興行。出座は政豊・奥野清順・後藤則明・長江喜維・奥村松陰・松村昌條・尼崎一清・津田基富・石塚嘉亨・妻屋秀員・山下伴政・片山俊方・曾谷政富（以上門人）・土佐光芳・安田長伯・窪田尚安（以上取持）青木大炊充（御供）の十七人（『烏丸光栄卿口授』五五一頁・『蓮沼

和歌集』五三三)。

延享二年(一七四五)68歳

四月十五日、三本木へ光栄が御成。当座(『蓮沼和歌集』三三一)。

十月十一日、加藤景範が上京。二十六日に江戸入り。十一月十九日に大坂へ帰る。帰途、京都に政豊を訪ねる(『竹里君関東紀行』東洋文庫蔵。大阪府立中之島図書館蔵紙焼き本による)。

延享三年(一七四六)69歳

二月十八日、松村昌條亭同門会(兼題)が行われるが、病中のため欠座する(『蓮沼和歌集』一八三)。

三月十四日、没(『蓮沼和歌集』跋文)。

延享四年(一七四七)

三月、加藤信成が政豊一周忌追善和歌を詠む(『承露吟草』七一九)。

延享五年・寛延元年(一七四八)

三月十四日、烏丸光栄薨去(宮内庁書陵部蔵『烏丸家系譜』)。

六月、加藤景範が『蓮沼和歌集』の跋文を記す(『蓮沼和歌集』跋文)。

十一月、五井蘭洲が加藤信成の家集『承露吟草』の序文を記す。冬、子の景範が跋文を記す(『承露吟草』序文・跋文)。

明和二年(一七六五)

十月、加藤景範が妻屋秀員の家集『積翠集』の跋文を記す。跋文によれば、景範は秀員より家集の校訂・謄写・跋文の執筆及び住吉大社への奉納を依頼されていた(『積翠集』跋文)。

年月日不詳

加藤信成との両吟月次(『承露吟草』五八・一一八・三三三・四六〇)。加藤信成が政豊の父の五十年忌に追善和歌を詠出(『承露吟草』七一四)。

(文学部准教授)